Everyone wants to leave it for the future 100 grassland villages

未来に残したい草原の里100選

冬師湿原が選定されました

「未来に残したい草原の里１００選」とは、美しい草原の風景を残す地域を選ぶ国内初の取組みです。草原をもつ自治体間の連携などのために設立された「全国草原の里市町村連絡協議会（平成28年11月発足）」が環境省や農林水産省、文化庁などの後援のもと選定を行っています。

このたび、第２回目の選定があり、「冬師湿原」を含む14箇所が新たに選定されました。これにより、現在全国で48箇所が草原の里に選定されています。冬師湿原は東北では２箇所目の選定であり、伝統的な管理が長年なされてきたことなどが高く評価されています。

なぜ今、「未来に残したい草原の里１００選」の取組みが始まったのか？その目的は？

かつて草原は、茅葺き屋根の材料を得たり牛馬を放したりと日本の暮らしを支える存在でした。生活に必要な草原を維持するために、利用のきまりや野焼きの技術が各地で生まれ引き継がれてきました。そういった草原も今や国土の１％未満に激減し、文化や知恵までも失われようとしています。草原が失われることは、草原にしか生きられない植物や昆虫が絶滅の危機に瀕するだけでなく、草原に関する地域の歴史や文化、人々の記憶や知恵、絆までが失われていくことを意味しています。

「未来に残したい草原の里１００選」は、全国に残る草原とその里に光を当て、人と自然の関わりの中で培われてきた知識や技術、人々の想いを共有し、次世代へ受け継ぐための取組みとして始まりました。共通の課題を抱える地域が互いの実践やアイディアを学び合い、共に未来へ進んでいくための取組みといえます。

（全国草原の里連絡協議会資料抜粋）

集落総出で野焼き作業。こうしてこの草原は長年守られてきた

冬師湿原の概要

10月12日認定証授賞式・記念フォーラム事例発表より（文責：（一社）鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会長船裕紀）

冬師湿原の魅力を一言で言い表すと「鳥海山と人の活動が織りなすモザイク景観」。

そのモザイク景観を構成している自然は草原や湿地ですが、その基盤は鳥海山の山体崩壊が大きく関係しています。そして、その上に成り立つ自然は、地域の人々が長く続けてきた生活、歴史や文化が大きく関係しています。

■冬師湿原（にかほ市の冬師地区および上坂地区）の地勢

冬師湿原は鳥海山の北麓に位置し、標高４００ｍ前後、鳥海山山頂からの水平距離は中心部で約12㎞の距離にあります。

■冬師湿原の成因・地形的特徴

冬師湿原は山体崩壊によって生み出された地形です。鳥海山は度重なる噴火を経験している活火山ですが、冬師湿原の直接的な成因は溶岩流ではなく、約２５００年前に起きた鳥海山の大きな崩落「山体崩壊」です。山頂部から大きく崩れた直後、広範囲に岩なだれが押し寄せ遠いところでは日本海にまで到達しました。海に達したエリアが天然記念物象潟（九十九島）です。

この岩なだれの痕跡を内陸部で見られる場所が冬師湿原で、全体の広さは約２６０haあります。

この岩なだれ地形（凹凸地形）とその成因は地形・地質的価値を高く評価され、鳥海山・飛島ジオパークの地形地質サイトに選定されています。この凹凸地形が冬師湿原の最大の特徴で、基盤かつ根幹です。

■土地管理者情報（草原の里１００選の応募者情報）

応募者は冬師牧野農業協同組合で会長は三浦吉松さんです。冬師湿原（冬師地区）の所有者、管理者ともに牧野組合です。（上坂地区にて管理しているエリアもあります）

■冬師湿原の生物多様性、多様で豊かな生態系

流れ山地形の上に成り立つ今の冬師湿原の生態系は草原と湿地です。

凹凸の凸部は流れ山でススキ草原が多くを占め、凹部は窪地でさまざまなタイプの湿地となっています。また窪地のような地下水の豊富な環境に成立するハンノキ林が、流れ山地形の冬師湿原には多く点在しています。ハンノキ林は野焼きで焼失することなく焼け残り、ハンノキ林の地上部は湿地を好むリュウキンカやミズバショウ群落になっています。

さらに窪地の地形を活かして、水を堰き止めて造られたため池も複数見られ、ジュンサイやヒツジグサといった水草の豊富なため池は、水生生物にとっても重要な生息環境となっています。冬師湿原は県内でも有数の希少な生物の宝庫といえます。

■人の暮らしとの関係―恵み

冬師湿原は冬師地区をはじめとする川下の地区にとって、稲作をはじめ生活に欠かせない水源です。扇谷地ため池のほとりには水神様が祀られていて、冬師地区では野焼き後に１年の豊作を祈願します。

野焼き後の草原は、一斉にワラビが顔を出します。当地区では観光ワラビ園を運営していて、ワラビを求めて多くの観光客が地区内外から訪れます。またため池の活用として、冬師地区住民が食用にジュンサイやヌマエビを採取する文化が残っています。

冬師湿原は長い年月の間、人の手によって維持管理、活用をしながら共生してきた場所。人々の営みが織りなす、美しい里地里山です。

■未来に残したい草原の里１００選授与式、フォーラムに参加して

ジオパークではジオ（大地）とその上に成り立つ自然や人々の暮らしに至るそれぞれの深い関わり合いを丸ごと理解することで、保護保全、教育活動、地域振興を推進しています。冬師湿原は地形地質サイトであり、端的に言うと守るべき場所、地域の宝です。

一方で、近い将来現在の規模の野焼きは不可能な時期が来ると予想しています。

（一社）鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会では、今回の１００選選定をきっかけに、少しずつですが牧野組合の会長をはじめ草原に関わる全国各地の方とつながり、冬師湿原の価値、魅力、現状について意見交換をすることができました。当協議会では、今後も地区の方と交流をしながら、人と自然、人と人、地域と地域の新しいつながりを築いていきたいと考えています。■

写真上４枚：冬師湿原に生息する水生生物や自生するリョウキンカ、ミズバショウ、オミナエシ、野焼き後に一斉に生えるワラビ。写真下：野焼き後の広大な草原（空撮）

未来に残したい

草原の里100選

認定証授与式

10月12日、東京農業大学横井講堂で未来に残したい草原の里100選の認定証授与式が行われ、冬師牧野農業協同組合会長の三浦吉松さんが認定証を受け取りました。

認定証

受賞者で記念撮影。中段左から2番目が三浦さん